

## 第2回まちづくり有識者会議 会議録

- 日 時 平成30年10月9日(火) 18:00~20:15
- 場 所 貸会議室マイ・スペース 1号室(東京都内)
- 出席者 【まちづくり有識者会議 委員】  
岡崎昌之委員(座長)、朝倉はるみ委員、関司直也委員、沼尾波子委員  
【小国町】  
町長、総務企画課長、企画財政室長、政策企画担当係長、木村主任

### ○内 容

政策企画担当係長より、第5次小国町総合計画基本構想の素案について説明し、各委員から意見をいただいた。

岡崎座長：縮小する計画というのは難しいものだが、良く書き込んでいる印象。現在の小国の状況、社会を巡る全体的な動きを上手く読み込んだ計画である。従来より短期間の計画となるので、具体性を持たなければならない。人口減少が著しい集落を、いかに計画に位置づけていくのかが難しいポイントだと思う。

この計画が、職員はもちろん住民にも示されると考えた場合、気になる点があるので、細かい文言や、計画の立ち位置について述べたい。

計画というのは、職員はもちろん、住民のコンセンサスを得ないと計画として活かされず、計画に示された将来を一緒には担えないものとなる。そのため文章表現が重要になってくる。

第2章第3節は、以前は具体的な文章だったものが、箇条書きになっている。「住民が町の現状をどのように捉えているのか、それを町としては、いくつかの調査や懇談会で把握してきた」といった文章を、導入部分に入れたほうが良い。住民と行政の距離が生じるような表現には注意すべきだ。

4ページの人口減少時代の到来の部分は、もう少し丁寧に書く必要がある。特に、小国町においては人口減少が前提にあつて、縮小化を図っていかなければならない部分がある事を、細かく書き込む必要がある。

全体的な計画のスタンスとして、国の国土形成計画と同じ2025年をターゲットにしている点がいいと思うが、定住自立圏構想や小さな拠点構想といった国の計画に沿った計画というだけではないというスタンスを出すべきではないか。小国の特殊な状況から、町独自の計画であるとすべき。国の政策に沿って、小国も施策を進めるという点が幾つかあったが、そうではなく小国の立場でやる、というスタンスを持つべきだ。

庁内からの意見にもあつたが、重要なことは、白い森の国のぶな文化やマタギ文化が、どこまで町民が共有する価値観となっているのか、再度真摯に検討してみる必要がある。

ただこれは他所にない小国町の特性、個性なので簡単に外すことはできない。幅広い意味のぶな文化を基盤にしながら、その自然環境を上手く活用した最先端技術を持つ企業が立地しているという位置づけを、計画として表わしていく必要がある。自然環境と先端企業の両立ということは、他の農山村では無いことなので、書き方を工夫し際立たせたい。他地域にある、たんなる製造業ではなく、自然とタイアップした先端産業だという位置づけではないか。

現在の若者の田園回帰は大きな流れ。単なる田園地域ではなく、もっと厳しい環境に若者が入り始めている。今回の基本構想は、小国の中の自然環境と先端産業や、地域外とのネットワークをどのように位置づけるかという視点が欠かせない。そういうところと、集落の動向をどのように位置づけるかという、2本の組み立てになるかと思う。

2ページ「小さな山あいの町ならではの」の「小さな」を取ってほしい。面積的なこともそうだが、小国が持つ意味は大きいので、削除したい。

朝倉委員：2ページの第1章第3節に関して、町民の意見と外部環境の二本立てにした方がわかりやすいのではないかと。第1章第3節は章として独立させ、第2章には住民の意見、第3章には外部環境を整理した方が、住民の方の意見を反映させていることがわかりやすくなるのではないかと。また、第3章から第5章は、上手く書き分けられていない印象を持った。第4章と第5章はもっと整理した方が良い。指針はシンプルに書かれてあるので、それを踏まえて第5章に具体的なことを書く。文章の構成が多くなるとわかりにくくなるので、できるだけシンプルにした方が良いという印象を持った。

岡崎座長：確かに第1章第3節の町民の想いは、書き始めたら多くなりすぎるということもあるが、少し内容が薄い感じがする。特に総合センター改築に向けた意見聴取については、ここだけ住民の意見が抜けている。若干内容を付け加えてほしい。ただこれを全部書き上げていくと大変になるので、総合計画基本構想としての位置づけとしてはこれで良いと思う。

朝倉委員：もう少し詳しく、住民が抱えている問題はどこにあるのかを明らかにした方が良い。

関司委員：課題は沢山書かれているが、良かったところや住民の想いや町への愛着など、高めていくところも盛り込んだ方が良い。ある意味「向かい風」の現状の中で、田園回帰やインバウンドなど、外から関心を寄せてくれる人たちは「追い風」である。そう考えると、少子高齢化で地域住民の協働が難しい中、外部から関心を寄せている人が増えていることを示し、トーンとして明るさを打ち出していくべき。どうしても縮み思考は、少人数ですべてを担うというマイナス思考になりがちだが、外部と繋がりを持てる環境

は整ってきている。行動していく上で自信に繋がり、一步踏み出せる。そういうトーンで第2章を見ていき、課題は手当てするが、追い風の施策は進めていくといった、その部分が見える事が大事だと思う。

町長：人口減少の中、小国町では中核企業と協力会社だけでも相当数が働いている。企業を分析し、その部分も書き込みたい。統計上の数字で消滅危機の書き方がされるが、労働力の確保のためにも一定の人口は必要。

単純に人口が減るから何とかしなくてはいけない、ということではなく、5,000人になったときにどういう町づくりを進めていくかを考えたい。

また、ぶな文化やマタギ文化とは何か、それをもっと町民にわかりやすく伝える方法がないか考えている。

岡崎座長：表現として、単なる「製造業」という捉え方よりも、「小国町の自然環境を最大限に活用した中で息づく中核企業」とした方が、住民にとっても、また計画としても言葉が馴染むと思う。

岡崎座長：学生と小国で合宿した際、最先端企業と自然環境のマッチングは面白く感じた。

町の一般的な人からは、工場の中に入りたい、ディスクローズしてほしいとの意見もあった。外部にディスクローズする環境づくりが問われている。

町長：企業側も、会社をわかってもらえないと採用できないという観点から、学生、親御さんにまで積極的に見学の間を開いている。

朝倉委員：企業の従業員の町民比率はどれぐらいか。

町長：協力会社も含め、7割が町民。

朝倉委員：企業とともに生きていくという環境か。

沼尾委員：最近の総合計画のなかには、こういう姿を目指したいということを住民の方と共有するために、イラストなどにして冒頭に載せている事例がある。この計画を読んでみて、目指すべき「白い森おぐに」の姿は何なのか、わかるようでわからなかった。ぶな文化やマタギ文化と、豊かな自然環境のもと最先端の企業があるということを通じて、どのような町の姿を描きたいのかが、本当はイラストなどがあると良い。時間的に難しいかもしれないが、中高校生がどのように町をイメージして、どう思っているのか、そこから面白いイラストなどが出てくると思う。工場があり、水があり、森があつたりし

て、そこに人が佇んでいるような絵になるかもしれない。それがそのまま「白い森」が掲げられていて、どこに向かうのかという点が気になった。

行政はガバナンスとマネジメントのバランスだと思う。住民のニーズがあり、そこから費用が発生し、参加と協働しながら地域を作る視点と、それをマネジメントで効率良く行うという視点がある。そう考えたとき、行政はガバナンスとしてどのような立ち位置にいるのが大事。自治体の多くは住民のニーズを汲み取り、国から補助金ももらいながら豊かになってきたが、これからは、国の財政も厳しいこともあり、町民参画で負担の在り方も含めて考えなければならない。住民側はどのような白い森の国を作りたいのか、想いを共有することが必要。

行政が主語になった書き方が気になった。具体的には、5ページの第2章第3節で「高校生をはじめとする若い世代の町内での就職・就業を促す」とあるが、「促す」ことが大事なのではなく、若者が町内で働きたくなるようなまちづくりが大事。その辺のスタンスのずれを感じる。

9ページ、第3章第4節の「まちづくりの目標」は誰のためか。人が育まれて、環境が生み出されて、暮らしがつくられるが、行政が人、環境、暮らしをつくるわけではない。人が豊かに育まれて、生活するための環境が守られて、いきいきとした暮らしがつくられていくための、場と環境を整えるのが行政の役割。「つくる」のは誰なのか。住民のために行政が汗を流しますということは伝わるが、これを住民が見たとき、行政がやってくれるんだと思ってしまうのではないかと心配している。例えば、13ページの第4章第3節上から3行目（暮らしの基礎となる雇用を守っていきます）は、行政としての覚悟を感じるが、むしろ、雇用が守られる環境をどうつくっていくのが大切であり、その立ち位置や、書きぶりを考えた方が良い。

4ページの第2章第1節、「団塊の世代が75歳を超える2025年には～高齢者福祉のさらなる推進を図っていくことが求められます」の部分で、医療保険や介護保険の負担が増えると見込まれる事から、健康増進を図っていくという意味はわかりづらい。予防に繋げるのであれば、もう少し書き込んだ方が良い。いつまでも元気で暮らせるような環境を整えるというのであれば、そういう書き方が良い。

5ページの第3節「労働力不足が深刻になっています～外国人技能実習生の受け入れも行われています」は、内容はその通りだが、もう少しポジティブな書き込みが必要。

岡崎座長：同じ所の、「アメリカ合衆国のサブプライムローン問題に端を発する」の部分は削除していいのではないか。「2007～2008年の世界的金融危機は」から始めていいと思う。

沼尾委員：人工知能やIoTといった技術があるが、日本経済で懸念されていることは、そういう新しいシステムをハンドリングするのが外国になっていること。そういうサー

ビスやシステムを活用した場合、常に利益が海外に流れていく。稼げる資源は何か、何をエンジンにして稼ぐのか。稼げる技術があればグローバルに稼げるが、そうでないところは衣食住で安全して暮らしていく環境をどう作るのかも課題。小国にある中核企業は、単なる下請けではなく、優秀な技術者がいるとか、水資源が豊富だという強みを発揮して、「小国で造らなくてはだめだ」という交渉力を持つような環境づくりをするべき。

外国人の方々をどのように地元溶け込ませるかは重要。元からある豊かな文化や、資源に外国からの人財など、いろいろなものが混ざり合い交流する、面白いカルチャーがあることが付加価値になる。関係を持つことで、繋がりや多様性が見える面白さがあるという場を、どのようにデザインできるか。最初は摩擦から始まると思うが、うまく間を繋ぎつつ、シェアオフィスなどの面白い空間を利用し、仕事やアフター5も楽しめるような場と、関係を作れる環境を整えることが、豊かな暮らしをつくる上では大事だと思う。そういう環境を整えることが小国の面白さに繋がると思う。関係人口や移住者が多い所には、必ずその環境が整っていると思う。そこを強調し書き込んではどうか。

そう考えると、暮らしを作る場をどう整えるかがポイント。12ページの第3節、「関係者と緊密に連携を図り」という部分が肝要。産業の発展だけではなく、農家と会社員の連携から面白いものが生まれたりすることもある。うまく繋ぐことで、交流のネットワークが展開されると思うので、多様な繋がりをつくる部分の話を広げて書いたら良い。

地域商社の展開も面白いと思う。商品化されているものもあれば、されていないものもあるのかもしれない。そこを含めた潜在的な「稼ぐ力」を丁寧に作ることが、大変だが大事なこと。

13ページ、「生涯学習や生涯スポーツの振興に取り組む」の部分は、課題を共有しながら助けあえる場の存在が重要。「生涯学習」とコンパクトにまとめるのはもったいない。ビジネス、暮らし、学校など、色々助け合う場があるので、生涯学習や生涯スポーツに絞らず、広げて書いても良いのではないか。

町長：ベトナム料理、韓国料理、アメリカのビールなどを道の駅におくと面白いかもしれない。

沼尾委員：最近、日本に来た外国人が悩んでいることは、彼らも地元の方とどう繋がるかわからないこと。コミュニケーションが図られれば、交流活動から商売にまで繋がる場合もある。きっかけが生まれるような場があると面白い。

町長：色々なジャンルで活躍の場がある。町内ではスポーツを通して交流の場が広がっている。積極的な機会を与えることが必要。

朝倉委員：「文化を融合させることで、住んでも、働いても、面白い町にしましょう」という考え方が良い。

町長：外国からの労働者が、帰国してからも町の良さを口にしてもらえれば、また繋がりができる。小国の良さをロコミで広げてくれる環境にしたい。

岡崎座長：外国人労働者の宿舎を一カ所にまとめず、集落に分散させるやり方もある。島根県石見銀山にある柵中村ブレイスでは、従業員住宅として社員寮ではなく、街並み保存のための古民家をリフォームして使用している。じわじわと地域に溶け込むような展開になっている。

計画は住民とどう共有するかが重要であり、わかりやすいイラストも必要かと思う。集落の消滅は厳しい話だ。単に集落が無くなっていくという縮小パターンだけではだめ。集落問題を計画の中にどのように書き込むか検討が必要。

朝倉委員：集落再編はいつ頃、どんな理由から行ったものか。

事務局：昭和45～46年、過疎という言葉が世の中に出てきた頃。再編に意図的に取り組んだのは西滝、東滝、高野、赤沢、豆納といった地域。自然消滅した地区は、集落戸数が3戸から5戸ほどで耕地面積も非常に狭く、急傾斜地で日照時間も少ない地域。高度成長のなかで、あまりにも他の地区と格差を感じて、自主的に集落を離れたという所もある。

今限界集落は人口年齢層で区分するが、当時は居住限界集落という言葉で表現し、地滑り雪崩の危険地帯、積雪4.5メートル以上、集落規模は30戸未満、町中心部までの距離が20km以上、又はその手前の拠点的な集落までも冬季間で1時間以上かかる、冬期分校又はへき地3級以上の分校の区内、水田面積が10ヘクタール未満などを基準に線引きした。当時117集落があったが、居住限界集落はどこか絞り込み整理し、昭和45年に過疎法ができた際に集落再編事業に取り組んだ。

岡崎座長：計画では、今後人口が増えていくという前提はないが、多様な人口想定はある。前計画では協働人口とした。集落がこれくらい減少すると明記する必要は無いと思う。

事務局：集落を一つずつ見ていけば、それぞれにその歴史や文化がある。ここがなくなるからと言う考えはなく、少しでもこういう集落を残したい。

岡崎座長：10ページの第4章第2節でアクティブシニアの記載があるが、叶水地区などにアクティブな移住者が来て何か新しいことを興し、集落も後押しするような動きがあ

る。移住者への評価もここで触れておく必要があるのではないか。すでに地域で定着しているような人財の発掘の必要性や既存人財の評価の書き込みが必要だと思う。集落維持に向けた新しいきっかけにはなる。

朝倉委員：外部からの偶然だけの増加に期待をかけるのは危険だと思う。具体的な数値は書かなくていいと思うが、人口の動きから消滅危機の可能性のある集落があるという事は書いた方が良くはないか。今後、住民の幸せになるのであれば、町の中での移住もあっても良いかと思う。最終的にはどこに住むかは個人の自由だが、集落としての将来性を町が理解することは重要な部分。より住みやすい地域への町内移住も書き込んだ方が良くと思う。

岡崎座長：住民が減った後の集落や自然の管理も重要。滝地区では、一度離れた集落に夏場だけ戻る動きもあり、それにより川の上流部がきちんと管理されている。非常に重要なこと。夏耕作型も町がサポートしていく必要がある。一度人間が住み始めた所は貴重な歴史的な痕跡が残っている。また将来、評価される可能性もある。ただ中心部に住居を与えれば良いというわけではないので、総合計画に盛り込むかどうかは別としても、計画を作る立場としては意識しておく必要がある。

朝倉委員：夏は山で、冬は里での暮らしも可能ではないか。

沼尾委員：「関係人口」ではなく「協働人口」にするこだわりは。

岡崎座長：前回の計画で定義した。

沼尾委員：「協働」より「関係」の方がより広い関わり方があるが、あえて「協働」でいきたいということか。両方書いても良いかと思う。

町長：「関係人口」の方がより広いイメージ。

岡崎座長：「協働人口」は、もう少し思い入れのある人という意味もある。

沼尾委員：国交省の会議があり、平成24年から29年までの三大都市圏とそれ以外の市町村で、人口の転入出、呼び込み回数の比較のマッピングが出た。置賜にも転入の方が多い勝ち組になっている市町がある。大都市より、小規模市町村への呼び込み人口が多くなっている。

事務局：本日いただいたご意見を、計画に反映させていきたい。また、次回の有識者会議は、会場を小国町内で検討しているので、別途日程を調整させていただきたい。